

これならわかる💡経済の仕組み 第3回

2013年3月14日

全2頁

お金の役割

常務執行役員
岡野 進

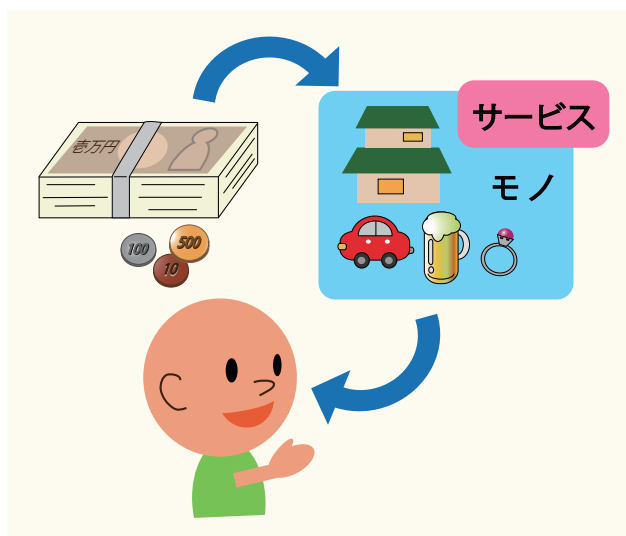
前回まで、お金とは何かということについてお話しました。それでは、お金はどのような働きをし、また私たちの経済においてどのような役割を担っているのでしょうか？今日はお金の役割とは何なのか考えてみましょう。

前回までお金自体についてのお話をいたしました。では、日本銀行が紙幣を大量に発行すれば、日本人はみんな金持ちになって豊かになれるのでしょうか。社会にお金がありさえすれば、経済がうまくいくと思ったら間違いでしょう。人々が買いたいモノがちゃんと生産されていなくて、モノがないのにお金だけがあってもモノの値段は上がるばかりになってしまい、実質的には生活が豊かだとはいえません。

お金自体は、社会全体で見れば『富』自体ではなく、モノやサービスを売買したり、その価値を測る尺度になったりするものです。お金で買うことのできる商品やサービス、それをつくり出すための設備や機械、そういったものが『富』の実体といえるでしょう。

もっとも個々人の場合には、お金をためてお金持ちになったら富んでいると考えることは誤りではないのです。ただし、お金を持っているというのは、昔のように金貨や銀貨といったそれ自体に価値

のあるモノをため込んだというのならともかく、現代の経済においては金融機関に貸していることを意味するのです（[第2回参照](#)）。金融機関は貸付や投資によって他の経済主体にお金を貸しているのですから、つまり、お金を持っているということは、社会の中で、自分が貸す側に立っていること、その大きさを金額で表しているということになるのです。それは、そのお金で社会（他人）の生産したモノを金額分だけ自分の意思に従って使うことができる権利だと言い換えてもいいでしょう。そうすることで、お金には経済



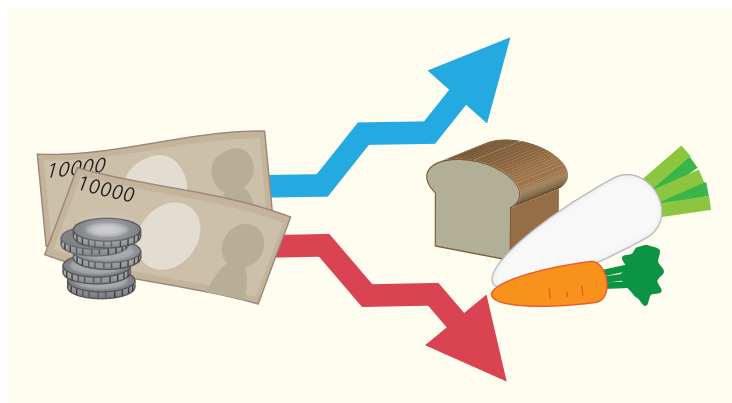
的な価値を蓄積する機能があるといえます。しかし、それは個人や企業など個々にとっての蓄積なのであって、経済全体としてはそれは誰かの負債であり、その裏づけとして保有されている実物資産というものが経済全体としては価値を蓄積しているものだということになります。

さて、お金の機能は蓄積ばかりではありません。お金はモノやサービスと交換することで、モノやサービスの取引ができ、流通ができるようになるのです。この機能も大変重要です。いったんお金に交換することなく物々交換しか行えないとしたら、現代の複雑な分業は成り立ちようがありません。生産された財やサービスは、お金という直接には消費できないものにいったん換えることで、何にでも交換が可能になるわけです。このいったんお金に交換することを売り買いというわけですね。これが、経済全体で交換がスムーズに行われるためのカギなのです。

さてその交換、すなわち財やサービスの売買がスムーズに行われるためには、お金が価値を測る尺度として有効に働かなければいけません。かつて、お金は、現金それ自体が貴金属であったり、お札も金や銀と交換できたりする存在でした。現代のお金はそうした裏づけはありません。経済における需給関係や中央銀行が行っている金融政策などが相まって貨幣価値が変動していると考えるべきでしょう。

お金の価値があまりに大きく変動することは好ましくありません。それでは価値を蓄積する機能は果たせなくなりますし、価値を測る尺度としてもうまくいきません。全般的にモノの値段が上がるインフレ（＝貨幣価値が下がること）も、全般的にモノの値段が下がるデフレ（＝貨幣価値が上がること）も避けたほうがいいという話になります。

それではゼロインフレの状態が理想なののでしょうか？最近の経済状況からの経験はこれに異を唱えています。ゼロインフレよりは少しインフレのほうがよいというのです。なぜでしょう？日本経済ではデフレ的な状況が長く続き、かつて不動産価格の下落もあって、いわゆる資産デフレもありました。こうした厳しい経済状況では実質金利を一時的にはマイナスにする選択肢も必要です。しかし、ゼロインフレでは金利をゼロにしても実質金利はやっとゼロになるだけです。多少マイルドなインフレがあるほうが金融政策の選択肢は広がり、不況の長期化も避けられるのではないかという議論なのです。



（以上）